

法王就任後2年間の総括

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

2013年3月13日に就任したフランチェスコは、法王として満2年が経過した。その間のできごとについては、ここ数日間、この2年の成果という形で次から次へとメディアで報道された。もちろん、2年は教会にとって長くはない。しかし、この2年は、カソリック教会にとって厳しいものであった。その直前のできごとを振り返ると、カソリックの退潮が恐れられていた。各種のスキャンダルやヴァチカン議会の統治力の欠如、財政問題、セクトの擡頭、国際的展望の欠如、信任の墮落ときりがなかった。しかし、この2年間には、法王の福音的説教から始まり、生きる希望と望みが再生された。危機は、キリスト教の日常生活の一部である。法王フランチェスコは、世界の危機と教会の複雑さの中に生き、希望と信任をもって生きることを奨励している。かくして、ローマのキリスト教徒は再生し、法王が司牧の旅をして訪れたところは、再度活気を呈している。教会の守旧派にとっては面白くないだろうが、批判をするということは新しいことの産みの苦しみでもある。

ある人は、法王をゴルバチョフにたとえている。というのは、ゴルバチョフは国外で愛され話題にされたが、ソ連内部では無視されていたからである。同じように現法王はキリスト教徒一般の受けは良いものの、教会の長老にはそうではないようだ。

法王の一日

現法王は毎朝4時45分に起床、部屋に明かりがつく。さらに宿舎のマルタホテルの2階の外側、つまり、北側に灯がともされ、また、サンピエトロ教会の南側にも明かりがつく。法王の部屋はマルタホテルの201号室だ。「私は一人では生きられない。皆と一緒に話しながら、活発に生きるのが好きだ。しかし行動する時には、私一人でよい。エレベーターに乗る時にも私一人で十分だ。」イエズス会出身の法王は、会の創始者イグナシウス風の瞑想をなし、2時間部屋の中にもこもっている。毎朝7時前には廊下の一番奥にあるチャペルでミサを捧げる。そして朝食。これも皆と一緒に。午前中は事務所に行ったり、聖書の「詩編」の部分を読み、さらにその日の手紙を読み、説教の準備をし、特別謁見や一般謁見をおこなう。その後天気の良い日には散歩。愛車はフォードフォーカスだ。13時頃食堂に現れ、昼食後30分程休息。そして、祈り、仕事と続く。夕飯は20時で、21時には自室に戻る。

臨時の聖年の制定

法王フランチェスコは、昨年韓国ソウルの司牧の旅の後、2014年8月18日、帰伊の機内で記者団の問いに答えた。その中でメキシコTVの記者の質問に次のように述べている。「私の法王の任務は長くて5～6年だ。もしくはもっと短く2～3年であるかもしれない。それで神の許に帰るのだ。」法王が就任以来言い続けていることがある。それは次のような言葉である。「教会は母である。そこで慈悲をもって傷は癒されなければならない。」「今は慈悲の時である。」「キリストは癒すことに飽きることはない。」そこで、法王就任満2年を迎えた3月13日に「神の慈悲」を中心に据える臨時の聖年を開くことにしたと公表した。期間は本年2015年12月8日より2016年11月20日。12月8日は第二ヴァチカン公会議閉幕した日、つまり、1965年12月8日より数えて50年に当たるからだ。1300年に

法王ボニファチオ8世によって「聖年」と定められた第1回目から数えて、正規の聖年、臨時の聖年を含めて29回目となる。その中で、前前法王ヨハネ・パオロ2世は1983年の臨時の「聖年」と2000年の正規の「聖年」と2度の聖年を執行した唯一の法王である。

前回2000年の「聖年」のローマへの巡礼者は、ローマ空港到着者数が2,450万人、イタリア統計局は全体で3,200万人と発表している。特筆すべきは「世界青年大会」と銘打った大会には200万人の青年があつまったことである。

「聖年」を迎えるローマ市は、現在も混乱しているローマの交通事情、輸送手段、環境問題を再検討して、受け入れ態勢に不備がないように短期間に整備しなければならない。

「GIUBILEO」(聖年、Anno Santo)の語源はヘブライ語の「JOBEL」で「羊」を意味する。これはユダヤ教の聖なる儀式の時に使われた「羊」の角が関係している。カソリック教会にあっては、これは一般に「赦し」を意味し、神との関係、隣人との関係を更新する可能性を与える機会である。一般的には「Anno Santo」と呼ばれているが、信仰を深め、またキリスト教徒としての務めを更新し、生きることを意味している。

「聖なる道」の解釈

2015年3月19日より法王の著した『La logica dell'amore』(愛の論理)が発売された。その中で法王はキリスト受難の「聖なる道」について次のように述べている。「我々の瞑想というものは独善であってはならない。人間の歴史を形作って来たキリストの憐れな子供たちを考えなければならない。十字架の中に世界の歴史があるのだ。」「キリストはここにはいない。蘇ったのだ。」「十字架なくしてキリストの蘇りは理解できない。」「言葉は愛であり、慈悲であり、赦しである。」「神は我々を愛しながら見守ってくれている。神の愛を受け入れたものは救われる。神の愛を拒否するものは罰せられるのだ。しかし、神は罰を下さない。神はただ愛し、扶けるのみだ。」「キリストが十字架を背負って前に進んで行くとき聖母マリアに出会う。聖母マリアの眼差しは、我々人間がきょうだいであることを教えてくれている。つまり、マリアは人を受け入れ、導き、扶けるという母親の眼差しである。マリアの中に苦しみに堪え、生の疲れに堪えうる神の力を見出す。」「キリストは十字架上の死の瞬間に『父よ、なぜ私を見捨て給うのか?』という言葉を発するが、これは十字架上で全てを失うということは全てに勝つということだ。」

「地獄」についての解釈

「神はすべてを赦すならば、何故地獄があるのか。」という問いに、現法王は次のように易しく話している。「神はすべてを赦すのか、神は善なのか。とにかくある時非常に賢い天使がいた。彼は誇り高く頭も良かったが、神を妬んでいて、神の座を奪おうと思っていた。それでも神は彼を赦そうとしていた。そうしたら天使は、神の赦しは要らない、自分が自分であれば十分だと宣言した。つまり、これが地獄なのだ。」「地獄というのは愛されることのない苦しみの地獄だ。神自らは誰も地獄へ送らない。地獄へ行くものは自らそれを選んでいくのだ。つまり、地獄とは、神の愛を受け付けられないものの神からの遠ざかりである。神の愛を要らないというものが行くところだ。」